

女性同士の親密な関係とメディアを巡る社会学研究の系譜と展望

上村 太郎

1. はじめに

近代以降の社会は、男性を性的主体とし、異性間で親密な関係を結ぶことを規範化してきた。そこでは、女性同士による「恋愛」「同性愛」などの親密な関係¹には困難が伴う。そして男性・異性愛中心の社会構造の維持・再生産の一端を担うものとされてきたのが、メディアである。本稿は、日本の社会学研究が、20世紀以降の日本のメディアと女性同士の親密な関係を、いかなる系譜と問題関心のもとで分析し、いかなる知見を明らかにしてきたのかを跡付ける。

メディアは、ジェンダーの観点からの社会科学研究では、男性・異性愛が中心化された社会を維持・再生産する装置の1つとして指摘されてきた。故に社会科学では、メディアの受け手の受容・送り手のポリティクス・表象の意味などとジェンダーとの関わりが、重要な研究課題とされてきた（井上 2009）。社会学もまた、この立場を共有している。例えば社会学者の江原由美子は、社会構造としての「ジェンダー秩序」を維持する「ジェンダー体制」の1つとして、「メディア」を挙げている。メディア産業は男性優位の世界であり、メディア表象はジャンル区分やメッセージの内容においてジェンダー化されており、メディアの受け手はその呼びかけに呼応してジェンダー化されたメディア世界に導かれるためである（江原 2001）。メディアは送り手・表象・受け手のいずれの水準においてもジェンダーにより構造化されており、またメディアを通して人々が既存のジェンダーのあり方に取り込まれるが故に、メディアは社会学にとっても重要な研究対象となってきた。

そして、男性・異性愛が中心化された社会では、女性が性的主体として女性同士で親密な関係を結ぶことが、とりわけ構造的に困難なものとなる。女性同士の関係が非性的なものと思なされた場合は異性愛よりも劣位におかれ、性的なものと思なされれば異性愛に反逆するものとして迫害を受けるため（東 2015）、そして男性こそが性的主体とみなされていることで、女性の性的主体としての欲望が見えにくくされているため（杉浦 2015）である。従って、女性同士の親密な関係は、男女や男性同士の親密な関係と比べて、劣位化・矮小化・逸脱化されてきた。こうした位置付けはメディア表象の在り方にも影響している。女性同士の親密な関係は殆どの場合、そもそも描かれない、あるいは友情など別のかたちとして消去されるという「不可視化」がなされるか、男性の眼差しに供されるポルノグラフィックな表象として描かれるという「性的客体化」がなされるかでしかなかった（堀江 2008; 菅野 2014）。加えてこうした位置付けは学術研究においても、女性同士の親密な関係がジェンダー体制としてのメディアといかに関わ

っているのかを検討することを、困難なものとしてきた。分析対象となるメディア資料の存在すら、長らく不明だったためである。

近年、こうした状況はようやく変化しつつある。一方では学術研究におけるジェンダーへの関心の高まりから、女性同士の親密な関係を描くメディアテキストが徐々に再発見・整理されていき、学術研究が可能な状況が整備されてきた。他方、性的マイノリティを示す「LGBT」という言葉のメディアを通じた一般化、性的マイノリティを主要人物とするメディア作品の増加や（堀 2023）、女性同士の親密な関係を主題とする「百合（ガールズラブ）」と呼ばれる新興のメディアジャンルの拡大・定着（上村 2024）に示されるように、メディアの状況も変化している。こうして現在、女性同士の親密な関係とメディアをめぐる学術的議論に一定の蓄積が生まれつつあり、これを受けて社会学研究も進展してきた。

とはいえ、女性同士の親密な関係とメディアの関係を扱う学術研究は歴史が浅く、未だ大きな余地を残している。加えて特に社会学では、こうした研究群は複数の学術領域の議論を受けて発展してきたため、その問題関心や「メディア」という対象の位置付けも複数の研究領域にまたがっており、見取り図が十分に整理されていない。

以上の問題意識に基づき本稿では、女性同士の親密な関係とメディアの関係を巡る社会学研究を、先行する議論の系譜を遡りながら整理する。以下、まず2節にて、女性同士の親密な関係とメディアを巡る研究の端緒として、1980年代以降の文学研究における、20世紀初めの日本の少女小説の再評価を位置付け、そこに現れた問題意識と論点を確認する。次に3、4節にて、これを踏まえた社会学研究の展開として、メディアを通じた「少女」の構築過程を論じる研究と、メディア言説による「女性同性愛」概念の編成過程を論じる研究の動向を整理する²。加えて5節にて、2節で論じたものと問題関心を共有する議論が「ジェンダー批評」として打ち出されるようになったことを論じ、ジェンダー批評が依然として社会学との接続可能性を持つことを示す。以上を6節で改めて整理し、今後の研究の展望を提示する。

2. 文学研究における「少女」への注目

女性同士の親密な関係がメディアとの関係において、日本の学術研究で初めて体系的に扱われるようになったのは、高等女学校における同性間の親密な関係を巡ってのことである。「エス」とも呼ばれるこの親密な関係への学術的関心は、1980年代の文学研究における「少女」の文化への再評価に起因しており、この研究群はその後の社会学研究にも参照されている。まず本節では、1980年代から90年代初めまでの「少女」に関する文学研究と、後の社会学研究への接続を、特にその代表的論者である本田和子の議論を中心に整理する。

本田和子『異文化としての子ども』（1982）は、今日に至るまでの少女文化論の原点とされる著作である（横川 1991）。1980年代は、フランスの歴史家フィリップ・アリエスの『〈子供〉の誕生』（1960＝1980）の翻訳により、今まで自明視されてきた「子ども」という存在が改めて注目された時期であり、本田の著作もこの潮流と呼応して発表された（高橋 2009）。本田は、「子ども」を人間の発達段階と捉える既存の「科学的」な児童研究に対し、「子ども」というカテゴリーの社会的・文化的側面を、児童文学を対象に捉えることを試みた。その中で本田は「少女」についても、『少女文化』の固有性」および「それが、何故、常に『無視されねばならなかつ

たか』を考え」ること（本田 1982: 147）を目的に、その社会的・文化的意味を検討している。本田の議論は、後続の研究群との関連を踏まえると、以下の2点において重要である。

第一に、「少女」を「近代」の日本において初めて創出された存在と捉え、メディアをその創出の一因として指摘した点である。『異文化としての子ども』で本田は、「少女文化」の固有性を「少女的なもの」という言葉で表現し、その「徴」が「さまざまなメディアの中に偏在し、少女たちの感性に敏く受け止められ」たとする（本田 1982: 151）。加えてその起源として、雑誌『少女画報』に掲載された、「少女」同士の親密な関係を描く吉屋信子の少女小説『花物語』（1916-24）を挙げ、「それは、わが国近代において、「少女」の誕生を告げる事件であった」（本田 1982: 172）とする。これ以降、本田は自身の少女文化論の中で、1899年に良妻賢母主義の教育機関として制度化された「高等女学校」と、これに応じて1900年代に都市新中間層の女学生を読者層に見込んで創刊された「少女雑誌」というメディアが、「少女」というカテゴリーを初めて生み出したという考え方を展開しており（本田 1983, 1990, 1991a）、この見解は久米依子（1994）など、文学研究の中で共有されていくようになる。

第二に、「少女的なもの」を「語るに値いしない領域」（本田 1982: 138）として位置づけてきた、既存の学術的・社会的認識の転換を試みた点である。このことは、本田が吉屋信子『花物語』を取り上げたことにも繋がっている³。本田は少女小説が「徹底した無視と侮蔑の中に置かれ」てきたとし（本田 1982: 146）、少女による「同性の愛」の追求もまた「感覚と情緒への耽溺」「社会性の欠落」とされてきたことを批判した上で、そうした「父性原理の餌食となりかけていた女性性の回復」として、吉屋信子のまなごしを価値づけている（本田 1982: 193-94）。この本田の議論以降、本田と立場を共有する研究として川村湊（1988）、「少女」同士の親密な関係を「女性性の回復」とする見解への批判的検討として佐藤（佐久間）りか（1996）や久米（2003）などが続き、少女雑誌・少女小説における「少女」同士の親密な関係に関する文学研究が蓄積した。また「少女」同士の親密な関係は、本田和子（1991b）および川崎賢子（1991）の議論を経て、「性愛」「同性愛」という観点からも論じられていくようになる。

本田以降の文学研究における、「少女」という存在とメディアの結びつきという知見は、3節で論じる「少女」向けのメディアを分析対象とした「少女」の歴史社会学に繋がっていく。さらに「少女」同士の親密な関係に関する知見の蓄積は、「少女」の歴史社会学のみならず、4節で論じる「セクシュアリティ」の社会学でも、「女性同性愛」を論じる手掛かりとして後に参照されていく。加えて1980年代という時期は、本田が少女文化論として行ったような、これまでの男性中心的な文学史のなかで阻害されてきた女性作家の作品を発見・再評価する試みが活性化し始めた時期でもある（斎藤 2009）。こうした試みは後に、5節で述べるように「フェミニズム批評」「ジェンダー批評」として概念化されていく。

3. 「少女」の社会学における「エス」への注目

文学研究が20世紀初めにおける「少女」の「誕生」を指摘し、「メディア」をその創出の要因として指摘したことで、社会学でも1990年代以降、「少女」というテーマと「少女雑誌」という対象が浮上し始める。例えば今田絵里香は社会学の立場から、既存の文学研究における「少女」に関する議論の課題として、「少女」の社会的背景・社会的機能・歴史的変遷の解明を挙げ

る。そして、これらの解明のための分析対象として少女雑誌を位置づけ、当時の女子が接触可能なほぼ唯一のメディアであり、「少女」というジェンダー・アイデンティティに独自の意味づけを与えた装置であり、そこに描かれる実践や価値観が読者に参照されるという3点から、その有用性を主張している（今田 2007）。このように社会学では、文学研究の知見を土台に、「少女」というカテゴリーの構築性という論点が、歴史社会学研究として探究されるようになった。そこでは、「少女」のイメージを社会に流通させ、読者を「少女」として社会化する装置として、「少女」向けのメディアが位置付けられ、重要な対象の1つとなってきた。これに伴い、少女雑誌に現れ高等女学校で実践される「エス」の文化もまた分析されてきた。

第一に「エス」を対象として、「少女」という存在の社会的背景・社会的機能に関するより重層的な議論が引き出されてきた。文学研究では本田以降、明治期の少女雑誌における、「誌上交際」を論じた佐藤（佐久間）（1996）や、少女小説を論じた久米（2003）により、「少女」同士の親密な関係は「女性性の回復」のように見える反面、大人が良妻賢母予備軍としての「少女」の性的逸脱を防ぎつつ、「少女」を異性愛へと水路づけるための、家父長制の補完制度でもあったと論じられてきた⁴。これに対し稲垣恭子は、「エス」は1930年代までには少女雑誌や少女小説を通して「女学生文化」として共有されていたとした上で、女学生の実際の手紙の分析と女学校卒業生へのインタビューを行い、「エス」が女学生たち自身にとっても特別な意味を持ったものとして理想化されていたのみならず、女学校卒業後以降も長期に渡ってその交友関係が維持されてきたことを論じている（稲垣 2004, 2007）。また今田絵里香（2007）も、文学研究がほとんど論じていない1920年代以降の少女小説や雑誌投稿欄を分析し、そこでは「エス」の描写を通して家族・男性・強制的異性愛への反抗もまた明示されていたこと、小説で描かれる「エス」関係は雑誌の読者間でも実践され、「少女」たちの文芸への動機づけや情緒的サポート、生涯にわたり活用されるネットワークを提供していたことを示し、「エス」を「ただちにカップルになる訓練とみなし、強制的異性愛の補強と解釈することはできない」と結論づけた（今田 2007: 220）。このように「エス」の表象や実践に関する検討を通して、女子に社会的規範を課す大人たちと、それに対抗したりそれを篡奪的に活用したりする女子たちとの、交渉の産物としての「少女」像が描き出されてきた。

第二に「エス」は、「少女」という存在の歴史的変遷を捉えるための指標として分析されてきた。宮台真司がいうように本田和子の少女文化論は、「少女的なもの」がその誕生以来、日本社会に一貫して存続していることを前提としていた。しかし戦前の女子が将来の良妻賢母として性から隔離されていた一方、よく知られるように戦後の女子は異性との恋愛に開かれている。これを踏まえ宮台は、本田のいう「少女的なもの」もまた歴史的な存在にすぎず、「少女」の内実は戦前から戦後に転換していると指摘した（宮台ほか 1993）。この指摘はその後、藤本純子（2006）や今田絵里香の一連の研究（今田 2011, 2014, 2019, 2023）にて、少女雑誌の内容分析と質的分析から検討されている。これらはいずれも、「少女」の内実の変化を示す指標の1つとして誌面における「エス」の消長を分析しており、少女雑誌では1950年代半ばまでに男女交際の内容が増加し、並行して「エス」の内容が減ったことが示されている。またその要因として、戦後の男女共学化を背景に、受け手と送り手の相互行為の中で、男女交際が明朗なものとして肯定され、逆に「エス」はセンチメンタルなものとして否定されるという、親密性の価値付けの変化が生

じたことが論じられている。つまり、「エス」は「戦後の少女にはふさわしくない『少女らしさ』として排除され」、「ボーイフレンドとともに明るく毎日を過ごす少女の方が『少女らしい』と捉えられるようになった」のである（今田 2011: 12）。

このように、少女雑誌が「少女」というカテゴリーを産み、そこには「エス」と呼ばれる表象・実践が伴っていたが故に、「少女」の歴史社会学ではその社会的・歴史的な位置づけを捉える上で、メディアに現れる女性同性の親密な関係を対象としてきた。一方で戦後、少女雑誌は男女交際や異性愛を中心的なテーマとし、「エス」の価値は失効していく。加えて、少女向けメディア自体もまた、小説を中心とした少女雑誌のみならず、少女漫画雑誌、少女漫画単行本、ファッション誌、テレビなどと多様化していくことで、少女雑誌が「少女」を構築するという前提が成り立たなくなる。従って、1970年代以降のメディアと「少女」の関連に関する社会学研究では、特定のメディアジャンルに対象を絞った上で、異性愛の表象を分析し、異性愛規範との関係から「少女」を論じるものを中心となり、女性同士の関係は注目されなくなる。

だが5節で後述する藤本由香里（藤本 1998, 2014）の議論が示すように、1970年代以降の少女向けメディアも女性同士の親密な関係を僅かながら描き続けている。「少女」の歴史社会学研究を引き継ぎつつこの点に取り組んだ貴重な研究に、上村太郎（2022）と秦美香子（2011）がある。上村は1960年代～1970年代初めの少女漫画雑誌を分析し、「同性間の親密性」が単に異性愛の規範化に伴って否定されたのではなく、「少女」読者に愛や性の問題を考えさせる教育的機能を担っていたほか、戦前の「エス」を参照した独自の論理で擁護されてもいたことを示した。また秦は現代の少女漫画において「少女」同士の絆が異性愛と同様のものとして描かれることで、むしろ異性愛を再考させている例を指摘している。これらは、少女向けメディアが1970年代以降、女性同士の親密な関係に新たな意味づけを与えていたことを示唆するものであり、ここに依然として研究の余地が残されていると考える。

4. 「セクシュアリティ」の社会学における「女性同性愛」への注目

社会学において「少女」が研究対象となった1990年代は、「セクシュアリティ」への関心もまた高まりを見せていた時代である。ミシェル・フーコー『性の歴史』第1巻（1976=1986）以来、「セクシュアリティ」という知は18世紀以降の近代西欧で作り出された装置として理解されるようになり、これに伴って「同性愛」概念もまた、リリアン・フェダマン『レズビアン』の歴史』（1991=1996）などにより、その歴史的・社会的構築性が探究されてきた（赤枝 2011）。日本の社会学も1990年代より、古川誠（1994）を端緒にまず「男性同性愛」研究が始まり、次いで2000年代以降、「女性同性愛」研究が蓄積してきた。そこでは「少女」の「誕生」と同様、日本における「女性同性愛」の「発見」が高等女学校の女学生に見出され、2節で論じた文学研究の知見も手掛かりにされながら、研究が進められてきた。

「女性同性愛」という「セクシュアリティ」の社会学研究は主に、メディアの「言説」に注目してきた。例えば、この研究群の先駆けとして「女性同性愛」の「発見」を新聞記事分析から論じた肥留間由紀子（2003）は、フーコーに依拠したヴィヴィアン・バーの議論に基づき、自らの方法論を「言説分析」と位置付ける。バーにおいて「言説」とは、出来事・人々・カテゴリーなどのある観点から表現するもののことであり、言説が何らかの仕方でもとまることで、

出来事が特定の仕方では生み出される。そして人々は、コミュニケーションの中で文化的に利用可能な言説を通じ、アイデンティティを構築するのである (Burr 1995=1997)。つまり、ある言葉を「言説」として捉えることは、言葉を「世界を写しとる」ものとする以上に、言葉が「現実」を作り出す働きに焦点を当てることを意味している (江原 2001)。「女性同性愛」の社会学研究は、「言説」としてのメディア表象を対象にすることで、女性同士の親密な関係が「女性同性愛」として認識可能になるありようを捉えようとしてきたといえる。

日本における「女性同性愛」の「発見」もまた、「少女」の「誕生」と同様に明治期の女学生の存在に見出されている。女性同士の親密な関係が「同性 (の) 愛」という認識の下で捉えられ始めた契機は、1911 年の新潟における女学校卒業生の心中事件とされている⁵。肥留間 (2003) は本田 (1991b) も参照しつつ、これを明治期の日本において「性」と「愛」が分離していく中での「女性同性愛の『発見』」として捉えた上で、これ以降に「女学生」同士の親密な関係が「同性愛」という言葉で「問題化」されていく過程を、新聞記事から明らかにした。またその背景には、新たな社会集団として出現した「女学生」への世間の関心の高まりと、婦人運動などに起因する「良妻賢母」規範の揺らぎへの不安があったとする。この知見を踏まえ、心中事件前後の新聞・性科学書・少女小説を分析したのが、赤枝香奈子 (2004, 2011) である。赤枝によれば、心中事件が「問題化」する中で、西洋性科学の知見が参照されたり、女性作家による擁護がなされたりすることで、「同性愛」を一時的・精神的な「仮の同性愛」と先天的・肉体的な「真の同性愛」に分ける認識枠組みが成立し、女学生同士の親密な関係が前者に位置付けられたという。つまり、戦前の「女性同性愛」は現在と異なる認識枠組みの下で捉えられており、女学生の親密な関係は未だ異性愛に開かれていない「少女」の一時的な「仮の同性愛」として、良妻賢母規範を侵犯しない限りにおいて社会的に容認されたのである⁶。この知見は、3 節で述べた「少女」の歴史社会学における「エス」の社会的背景・社会的機能に関する議論とも重なる。

また杉浦郁子は、こうした戦前を対象とした研究群、および 2、3 節で述べた久米 (2001) や稲垣 (2004) による「エス」の研究も踏まえつつ、「女性同性愛」概念の通時的な見取り図を描くことを目指した (杉浦 2005)。杉浦は 1945 年以降から 1990 年代までの一般雑誌記事とミニコミ誌を分析し、戦後の「レズビアン」言説を検討している。杉浦によれば、一般雑誌での 1950 年代までの「女性同性愛」言説は戦前と共通していたが、1960 年代より肉体的関係を持つ女性同性愛が「レス (ズ) ビアン」として語られ、1960 年代後半になると男性読者の性的欲求に応えるセクシュアルな側面が強調されていった (杉浦 2005; 杉浦 2013)。そして、この「肉欲的なレズビアン」というモチーフが 1970 年代以降も反復され、ステレオタイプな偏見として広まっていく (杉浦 2006; Sugiura 2006)。これに対し、1970 年代以降に現れるレズビアン当事者グループでは、一方でこうした言説を自らのアイデンティティや性的欲望を語る言葉として読み替え、他方でレズビアン・フェミニズム運動の中で「レズビアン」を対等な関係として称揚していくようになる。こうした言説は 80 年代以降、一般雑誌でも徐々に取り上げられるようになった (杉浦 2006, 2017)。

加えて、戦前の「仮/真の同性愛」から戦後の「レズビアン」への転換について、赤枝香奈子 (2014) が一般雑誌のほか性風俗雑誌や性科学書も参照し検討している。赤枝によれば、1950 年代にアルフレッド・キンゼイによる西洋性科学の知見が紹介されたことで、女性同性愛は「エ

ス」のような女学生同士の精神的関係から、大人同士の肉体的関係を意味するものへと転換した。そして、こうした関係や主体が「レス（ズ）ビアン」と呼ばれるようになり、その後 1960 年代の一般雑誌にて「エス」や「宝塚」、「レズビアンバー」など日本の事例と結び付けられることで、女性同性愛を意味する概念として普及したという。これらの知見は、3 節で述べた「少女」の歴史社会学における「エス」の歴史的変遷に関する議論とも重なる。

このように「セクシュアリティ」の社会学は、幅広いメディアにおける表象＝言説の分析から「女性同性愛」という認識枠組みの構築と変遷を示してきた。しかし課題として、以下の 2 点があると考ええる。第一に、戦後の少女向けメディアにおける「女性同性愛」言説である。戦後に関する研究では一般雑誌や性科学書が分析される一方、戦前の「女性同性愛」研究で重要な分析対象となっていた少女雑誌は検討されていない。これは戦後に関する研究が、大宅壮一文庫の雑誌記事索引検索（杉浦 2005）や、国会図書館の書籍キーワード検索（赤枝 2014）によるという、資料調査の限界に起因する。大人による女子の管理と女子の主体性の尊重という「少女」および少女雑誌の両義性や、3 節で述べた上村（2022）の議論も踏まえると、戦後の少女向けメディアでは一般雑誌における「肉欲的レズビアン」イメージとも当事者による言説とも異なる、独自の「女性同性愛」言説が構築されてきたことが想定できる。

第二に、戦前に「仮の同性愛」とされた精神的・非肉体的関係が、戦後にいかに意味づけ直されたのかが明らかになっていない。赤枝は戦後期以降における「仮の同性愛」の行方について、一方では本節で述べたように「仮/真」という枠組みが戦後に失効し、「真の同性愛」としての「レズビアン」に再編されたとするが、他方で現代のメディアジャンルである「百合」の存在を挙げ、それが「より『ソフトな』レズビアン関係」を描くものであるとしつつ、『真の同性愛』は『レズビアン』へ、『仮の同性愛』は『エス』を経て現在の『百合』へと結び付き、こんにちに至っていると考えられる」とも主張している（赤枝 2011:211-12）。付け加えると 5 節で述べるように、「百合」に関する研究では、社会学研究の知見が十分に踏まえられないままに、「エス」的關係が日本文化の中で一貫して存在してきたという認識が定説化している。「エス」の文化が過去のものとなり「仮の同性愛」という枠組みが失われて以降も、「エス」ないし「仮の同性愛」的關係が女性同士の親密な関係をめぐる言説の中に位置づけられてきたのであれば、それがいかになされてきたのかについても、同様に精緻な分析が必要となる。

5. ジェンダー批評における女性同士の親密な関係への注目

本田が『異文化としての子ども』（1982）を著した 1980 年代は、日本の文学研究・文学批評に、男性論者を中心とした文学界に異議を申し立て、女性の視点からテクストを読み替える試みが盛んに現れた時期である。こうした試みはジョナサン・カラー『ディコンストラクション 1』（1982=1985）など欧米の文芸批評理論の輸入と重なりつつ、「フェミニズム批評」として流行した（斎藤 2009）。その後、フェミニズム批評はジェンダー概念を導入し、ジェンダーに起因するより多様な権力関係を扱い始め、1990 年代半ばには「ジェンダー批評」という学問領域が明確に打ち出されるようになった（岡野 2000）。加えてそこでは、近代文学のみならずサブカルチャーを含む幅広いメディアにも問題意識が向けられている（斎藤 2009）。

本田による『花物語』の再評価をはじめ、吉屋信子がフェミニズム批評の中で早くから注目

されてきた(斎藤 2009)ように、ジェンダー批評では「女性」かつ「同性同士」の関係を描くメディア作品に対して、大きな関心が向けられてきた。加えて1節で述べたような学術的関心の高まりやメディア表象自体の増加もあり、近代文学に限らず現代までの、また文学に限らず映画・テレビ・漫画など、幅広い作品が議論されている。本稿の紙幅ではその全体を示すことができないが、女性同性の親密な関係を扱うジェンダー批評は、男性・異性愛中心主義と女性同士の親密な関係の間に生じる抑圧と抵抗の力学を、作品の表象から捉えるという方向性が共有されているといつてよいだろう⁷。例えば溝口彰子(2023)は、レズビアンカップルを描く『LOVE MY LIFE』について、漫画原作がリアリティのあるレズビアンを描く一方、映画版は異性愛者の観客を視覚的に楽しませる作品であると述べ、前者の「脱・異性愛規範」性を評価し後者の「レズビアン」の「疎外」を批判する。また社会学の立場からのジェンダー批評も生まれており、4節で挙げた杉浦郁子(2017)は映画『下妻物語』を分析し、ヒロイン2人の関係性の演出における「恋愛」的要素の排除に「レズボフォビア」を指摘しつつ、2人の関係をあえて「恋愛」として「誤読」する解釈実践に、異性愛規範を攪乱する可能性を見出している。このようにジェンダー批評研究では、女性同士の親密な関係の表象における異性愛規範や男性中心主義の指摘や、それらへのオルタナティブを示すような表象や解釈の提示がなされてきた。特に近年では、ステレオタイプ的ではない女性同士の親密な関係を描く作品も増加しており⁸、前者のみならず後者の方向性での議論も盛んに行われている。

そして、かつて少女小説の文学研究がその後の社会学研究に示唆を与えたように、ジェンダー批評も依然、社会学との接続可能性に開かれている。ここでは、3節および4節での議論を踏まえ、以下の2点を指摘したい。第一に、ジェンダー批評による女性同士の親密な関係の再発見・再評価は、社会学にとっても大きな手掛かりとなると考える。この点について、3節および4節で論じた研究動向と関連する議論である、1970年代以降の少女漫画を論じた藤本由香里を取り上げたい。藤本によれば、少女漫画では1970年代より「レズビアン」ないし「女どうしの愛」が描かれはじめた。当初は数も少なく、悲劇的でステレオタイプな表象だったが、1990年代以降になると作品数が増加し、その描かれ方も、あっけらかんとした明るいものに変化したという(藤本 1998)。藤本はこうした変化について、『レズビアンであること』はすでに、重い現実の軛だったり、『その先』のない閉塞感を意味したりすることをやめたのだとし、それは「時代の変化の中で変わってきた女性の意識が形を取ったもの」とであると論じる(藤本 2014)。この議論は、3、4節で論じてきた社会学研究が未だ十分に検討していない、1970年代以降の少女向けメディアに描かれる女性同士の親密な関係の研究可能性を照らし出している。

第二に、ジェンダー批評の議論を土台に、メディア表象の成立可能性と理解可能性を支える歴史的・社会的文脈の解明という探究の方向性が想定でき、またその必要があると考える。この点について、1節でも述べた「百合(ガールズラブ)」の研究を例として論じたい。「百合」は近年、2014年に文芸誌『ユリイカ』で特集が組まれるなどジェンダー批評的な関心が高まっており、英語圏でもNagaike(2010)、Fanasca(2020)、Friedman(2022)などの議論があり、ここでは総じて「百合」に既存のジェンダーの在り方に対する抵抗的側面が見出されている。議論の中では歴史的・社会的側面にも触れられる傾向にあるが、その記述には課題もある(上村 2024)。歴史的側面の記述については、戦前の「エス」・戦後に女性同士の親密な関係を描いた

「少女」向けの諸作品・現代の「百合」の連続性が自明視され、単純な系譜化がなされる傾向にある。特に海外の研究では、「少女」や「女性同性愛」の戦前から戦後の転換を論じた 2010 年代以降の社会学研究が参照されず、「エス」的關係の表象が日本文化の一貫した伝統的特性であるかのように仮構されている。加えて「百合」に関しては、ジェンダー批評的な表象への関心が高待っている反面、メディア研究で一般になされるような、表象と関連した「送り手」や「受け手」の議論は、熊田一雄（2005）の理論的考察や Maser（2015）のアンケート調査などを貴重な例として、ほとんどなされていない。

このように、かつて「少女」や「女性同性愛」の社会学が文学研究から示唆を得たように、ジェンダー批評研究による作品の再発見・再評価は依然として、社会学研究に対しても有用な示唆を与えている。と同時にジェンダー批評の知見は、社会的・歴史的文脈との関わりにおいて表象を位置付けるという検討の可能性と必要性にも開かれている。

6. 今後の研究の展望

以上、女性同士の親密な関係とメディアに関する研究動向を、社会学領域を軸に概観してきた。最後に、これらの研究の知見を統合的に整理した上で、既存研究の課題を踏まえ、今後の研究の方向性を展望する。

社会学において、女性同士の親密な関係とメディアをめぐる問いは、一方で 20 世紀以降の日本における「エス」關係の検討を通した「少女」という存在の探求として、他方で 20 世紀以降の日本における「女性同性愛」カテゴリーの構築過程の検討を通した「セクシュアリティ」という知の探求として、なされてきた。こうした研究により、以下の知見が明らかになっている。日本では少女雑誌を通して、高等女学校にて女学生が親密な関係を結ぶことが、1920～30 年代頃には「エス」という「少女」の文化として普及していた。それは社会的にも、「女性同性愛」を「仮の同性愛/真の同性愛」に分ける認識枠組みのもと、良妻賢母規範と矛盾しない精神的な「仮の同性愛」とされることで容認されていた。しかし戦後、男女共学化に伴い、「少女」には少女雑誌を通して同性間の親密な関係ではなく異性間で親密な関係を追求することが規範化された。これと並行して、西洋性科学が紹介されることで、「女性同性愛」は「仮/真」という二分法ではなく、大人の肉体的関係を伴う「レズビアン」として捉え直され、1960 年代以降の一般雑誌にてスティグマ化していった。

これらの研究は、1980 年代の文学研究における少女小説の再発見を手掛かりに、明治期の女学生を『少女』の誕生』『女性同性愛』の発見の契機として見出し、「少女」「女性同性愛」という存在の社会的・歴史的な構築過程を問うてきた。そしてメディアを社会化の装置や言説として捉える理論的枠組みに依拠し、またメディアの送り手や受け手にも注目することで、メディアの分析からこの問いに対する一定の知見を明らかにしてきた。しかし、明治期を出発点に時代を下っていく形で議論を積み重ねてきたため、1970 年代以降について検討の余地がある。

一方で文学研究はその後、ジェンダー批評の確立に伴い、女性同士の親密な関係の表象を、少女漫画をはじめとした 1970 年代以降のメディアについても論じている。またそこでは同性愛・男性中心主義への批判だけでなく、それらへのオルタナティブとなる可能性を持ったテキストも指摘されている。この点において、ジェンダー批評は依然、社会学にとっても示唆に富

む議論を展開している。しかしジェンダー批評研究は、特定のメディアテキストに注目する性質上、作品群の羅列による安易な系譜化という陥穽や、「送り手」「受け手」の検討をはじめとしたメディアと社会の関わりへの解明に関する限界を抱えている。

以上から、ジェンダー批評による1970年代から現代に至るまでの探求を手掛かりに、作品単位にとどまらない網羅的な資料収集と、送り手や受け手の分析も含めた包括的分析から、女性同士の親密な関係の表象が表象可能/不可能となってきた社会的・歴史的な文脈を検討することを、社会学研究における今後の展望として提示したい。また現代のメディアでは、ジェンダー評論が既存のジェンダーの在り方に対する対抗的側面を指摘する表象も数々現れており、これらが人々や社会における女性同士の親密な関係の認識枠組みをいかに、どの程度再構築していくかも、同様に社会学の今後の課題となるだろう。社会学はメディアに、人々の社会化や言説の産出を通して社会を構築する一因としての位置付けを与え、実際に「少女」や「女性同性愛」に関する研究群に見られるように、メディアと社会は相互作用しながら変化していくことを示してきた。つまり、ジェンダー秩序は再生産されるのみならず常に変動の可能性も内包しており（江原 2001）、メディアもまたその変動を産み出しうるためだ。

メディア表象とそれを巡る実践を通時的・包括的に検討することは、ジェンダー秩序の再生産と変動の過程を捉えることを意味している。「女性同士の親密な関係」という、一方で女性の性が統制され、他方でそうした統制に対する抵抗が生まれる、女性に対するジェンダーの規範が最も先鋭的に現れる場の1つ（赤枝 2014）を対象としてこうした検討を行うことは、近代が残した男性・異性愛中心主義を変革させる手掛かりの一端を見出すことに繋がるだろう。

注

- 1 本稿では、現在一般に「恋愛」や「同性愛」として概念化されている関係を、「親密な関係」として示す。本稿で取り上げる研究群が示してきたように「親密な関係」を指示するための概念自体が歴史的・社会的に構築されたものであるが、こうした概念群を包括的に論じる必要性上、便宜的にこの語を使用する。
- 2 本稿では「少女」「女性同性愛」「セクシュアリティ」という鉤括弧付きの表記を、それらの対象が歴史的・社会的に構築されたものであることを示すために用いている。
- 3 同時期に同様の試みを行った著作に、吉屋信子とその著作を論じた吉武（1982）がある。
- 4 社会学の立場からの同様の議論として、「友情」と「セクシュアリティ」の観点から、本田（1991b）を批判的に検討しつつ「エス」を論じた赤枝（2005）がある。
- 5 この知見は古川誠（1994）が示したとされるが、肥留間は「女性同性愛に関しては1910年代の資料も30年代の資料の扱いにも区別をつけず、また女性同性愛に対する社会的な認識も…一括りにした「雑なまとめ方である」（肥留間 2003:11）としており、注意が必要である。
- 6 「少女」以外の女性同士の親密な関係を検討した論文として、黄綿史（2008）は1910～30年代の新聞・雑誌記事における都市部労働者階級の女性たちを分析し、その親密な関係は肉体的接触を伴う「真の同性愛」であることが自明視され、異常性が強調されたという。
- 7 本節では特に、前節までで述べた「少女」や「女性同性愛」の研究、また現代のメディア状況との関連で重要と思われる研究に焦点を絞って論じている。またここでは女性同士の「恋愛」

「同性愛」を論じたものを取り上げたが、他方で「女性のホモソーシャルリティ」に関する議論の進展（東 2006, 2015）などにより、女性同士の「友情」に焦点を当てたものも蓄積している。8 とはいえ、依然として、こうした作品群の絶対数は少ないこと、また女性同士の親密な関係を表象・受容する際には差別やステレオタイプとの結びつきに細心の注意が必要であることは、強調したい。

文献

- 赤枝香奈子, 2004, 「女同士の親密な関係と二つの〈同性愛〉——明治末から大正期における女性のセクシュアリティの問題化」仲正昌樹編『差異化する正義』御茶の水書房, 117-56.
- , 2005, 「女同士の親密な関係にみるロマンティック・ラブの実践——「女の友情」の歴史社会学に向けて」『社会学評論』56(1): 129-46.
- , 2011, 『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版.
- , 2014, 「戦後日本における「レズビアン」カテゴリーの定着」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, 129-51.
- 東園子, 2006, 「女同士の絆の認識論——「女性のホモソーシャルリティ」概念の可能性」『年報人間科学』27: 71-85.
- , 2015, 『宝塚・やおい、愛の読み替え——女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社.
- Burr, Vivien, 1995, *An Introduction to Social Constructionism*, London: Routledge (田中一彦訳, 1997, 『社会構築主義への招待』川島書店.)
- 江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房.
- Fanasca, Marta, 2020, “The Depiction of female/female relationships in yuri manga,” Diego Cucinelli & Andrea Scibetta, *Tracing Pathways* 雲路, Firenze: Firenze University Press, 51-66.
- Freadman, Erica, 2022, *By Your Side: The First 100 Years of Yuri Anime & Manga*, Louisville: Journey Press.
- 藤本純子, 2006, 「戦後期少女メディアにみる読者観の変容——少女小説における「男女交際」テーマの登場を手がかりに」『出版研究』36: 75-93.
- 藤本由香里, 1998, 『私の居場所はどこにあるの?——少女マンガが映す心のかたち』学陽書房.
- , 2014, 「「百合」の来し方——「女どうしの愛」をマンガはどう描いてきたか?」『ユリイカ』46(15): 101-09.
- 秦美香子, 2011, 「少女漫画と「少女」の構築——現代日本におけるジェンダーの一樣相」神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文.
- 肥留間由紀子, 2003, 「近代日本における女性同性愛の「発見」」『解放社会学研究』17: 9-32.
- 本田和子, 1982, 『異文化としての子ども』紀伊国屋書店.
- , 1983, 『子どもの領野から』人文書院.
- , 1990, 『女学生の系譜——彩色される明治』青土社.
- , 1991a, 「戦時下の少女雑誌——生き延びる少女幻想」大塚英志編『少女雑誌論』東京書籍, 7-43.

- , 1991b, 「『S』——他愛なく、しかも根源的な愛のかたち」『imago』2(8): 68-73.
- 堀あきこ, 2023, 「セクシュアリティとメディア——表象と性をめぐる規範」田中東子編『ジェンダーで学ぶメディア論』世界思想社, 187-201.
- 堀江有里, 2008, 「引き裂かれる自己/切り裂かれる身体——レズビアンへのまなざしをめぐって」金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル——ジェンダー/セックスの二元論を超えて』明石書店, 299-312.
- 古川誠, 1994, 「セクシュアリティの変容——近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」『日米女性ジャーナル』17: 29-55.
- 今田絵里香, 2007, 『「少女」の社会史』勁草書房.
- , 2011, 『1945～70年の少女文化とジェンダー』京都大学グローバルCOEプログラム親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点.
- , 2014, 「異性愛文化としての少女雑誌文化の誕生」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, 57-77.
- , 2019, 『「少年」「少女」の誕生』ミネルヴァ書房.
- , 2023, 「少女雑誌における親密な関係の変容——『ひまわり』『ジュニアそれいゆ』の比較」北田暁大・東園子編『岩波講座社会学第12巻 文化・メディア』岩波書店, 159-84.
- 稲垣恭子, 2004, 「女学校の手紙の世界」『ソシオロジ』49(2): 111-18.
- , 2007, 『女学校と女学生』中公新書.
- 井上輝子, 2009, 「メディアが女性をつくる？女性がメディアをつくる？」天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『新編日本のフェミニズム7 表現とメディア』岩波書店, 1-36.
- 菅野優香, 2014, 「パンパン、レズビアン、女の共同体——女性映画としての『女ばかりの夜』（1961）」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, 153-71.
- 上村太郎, 2022, 「少女漫画におけるジェンダー規範の転換と女同士の絆——『週刊少女フレンド』1963～72年の分析から」『マンガ研究』28: 60-91.
- , 2024, 「「百合」ジャンルの成立過程の検討——同人活動の創作者の実践に基づくジャンルの概念分析」『ソシオロギス』48: 118-40.
- 川村湊, 1988, 「妹の恋——大正・昭和の〈少女〉文学」『幻想文学』24: 78-87.
- 川崎賢子, 1991, 「露おく花のメランコリー——吉屋信子『花物語』の汎エロス性」『imago』2(8): 78-83.
- 黄綿史, 2008, 「言説としての『女性同性愛』の誕生——1910年代～30年代の下層階級における『同性愛』関連記事の分析」法政大学大学院国際文化研究科修士論文.
- 熊田一雄, 2005, 『男らしさという病？——ポップ・カルチャーの新・男性学』風媒社.
- 久米依子, 1994, 「メディアにおける〈少女〉の成立——雑誌『少年園』をめぐって」『目白近代文学』11: 17-26.
- , 2001, 「エス——吉屋信子『花物語』『屋根裏の二処女』（小説）」國文學編集部『恋愛のキーワード集——文学そして演劇・映画・漫画』學燈社, 152-54.

- , 2003, 「構成される「少女」——明治期「少女小説」のジャンル形成」『日本近代文学』68: 1-15.
- Maser, Verena, 2015, “Beautiful and Innocent: Female Same-Sex Intimacy in the Japanese Yuri Genre,” Graduate School of Language and Culture, University of Trier, Doctoral Thesis.
- 宮台真司・石原英樹・大塚明子『サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの現在』PARCO 出版局.
- 溝口彰子, 2023, 『BL 研究者によるジェンダー批評入門』笠間書院.
- Nagaike, Kazumi, 2010, “The Sexual and Textual Politics of Japanese Lesbian Comics: Reading Romantic and Erotic Yuri Narratives,” *electronic journal of contemporary japanese studies*, (2024 年 8 月 29 日取得, <http://www.japanesestudies.org.uk/articles/2010/Nagaike.html>).
- 岡野幸枝, 2000, 「フェミニズム批評/ジェンダー批評」『昭和文学研究』40: 160-63.
- 斎藤美奈子, 2009, 「フェミニズム文学批評を「読む/学ぶ/書く」ために」天野正子・伊藤公夫・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『新編日本のフェミニズム 11 フェミニズム文学批評』岩波書店, 1-30.
- 佐藤（佐久間）りか, 1996, 「「清き誌上でご交際を」——明治末期少女雑誌投稿欄に見る読者共同体の研究」『女性学』4: 114-41.
- 杉浦郁子, 2005, 「一般雑誌における「レズビアン」の表象——戦後から 1971 年まで」『現代風俗学研究』11: 1-12.
- , 2006, 「1970、80 年代の一般雑誌における「レズビアン」表象——レズビアン・フェミニストの言説の登場まで」矢島正見編『戦後日本女装・同性愛研究』中央大学出版部, 491-518.
- , 2013, 「男の猥談に現れる女の性欲——1960 年代雑誌記事の「レズビアン」言説」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房, 115-33.
- , 2015, 「「女性同性愛」言説をめぐる歴史的研究の展開と課題」『和光大学人間学部紀要』8, 7-26.
- , 2017, 「映画『下妻物語』における女同士の友情——親密性をめぐる誤読の快楽と政治」『新社会学研究』2: 25-35.
- , 2017, 「日本におけるレズビアン・ミニコミ誌の言説分析——1970 年代から 1980 年代前半まで」『和光大学人間学部紀要』10: 159-78.
- Sugiura, Ikuko, 2006, “Lesbian Discourses in Mainstream Magazines of Post-war Japan: Is Onabe Distinct from Rezubian?,” *Journal of Lesbian Studies*, 10(3/4): 127-44.
- 高橋靖幸, 2009, 「子どもを「異文化」として問う視点「異文化としての子ども」から「子どものエスノメソドロジー」へ」『立教大学教育学科研究年報』53: 135-48.
- 横川寿美子, 1991, 『初潮という切札——少女批評序説』宝島社.
- 吉武輝子, 1982, 『女人 吉屋信子』文藝春秋.

女性同士の親密な関係とメディアを巡る社会学研究の系譜と展望

上村 太郎

本研究は、女性同士の親密な関係とメディアを巡る社会学研究の系譜を整理し、今後の研究の可能性を展望する。女性同士の親密な関係が学問の俎上に乗ったのは、1980年代の文学研究での少女小説の再評価による。これを手掛かりに社会学も、少女向けメディアによる「少女」の構築や、メディア言説による「女性同性愛」概念の構築に関して研究を展開したが、明治期から時代を下る形で研究が進められたため、1970年代以降に関し検討の余地がある。文学研究はその後「ジェンダー批評」を確立させ、女性同士の親密な関係を描く様々なメディア作品について、社会学に対しても示唆的な議論を展開しているが、表象の歴史的・社会的文脈の検討に課題がある。以上から、ジェンダー批評の探索的知見を手掛かりとした、女性同士の親密な関係の表象を成立させている歴史的・社会的文脈の検討が、メディアによるジェンダー秩序の再生産と変動を捉えるために有用であると提案した。

A Historical Review of Sociological Research on Media Representations of Intimate Relationships between Women

KAMIMURA Taro

This paper organizes and evaluates sociological research on media representations of intimate relationships between women and provides insights for future research. The academic discussion originated with the reevaluation of girls' novels in literary studies in the 1980s. Building on this foundation, sociological research has examined how "Shojo" is constructed through media for young women and how media discourses have shaped the concept of "female homosexuality." However, as these studies often focus on historical perspectives, there remained room for further study after the 1970s. Meanwhile, literary studies, through the development of "gender criticism", have contributed significant insights into representations of female intimacy across various media. Despite this progress, such discussions frequently lack a thorough analysis of the historical and social contexts underlying these portrayals. By integrating findings from gender criticism into an interdisciplinary approach, this paper highlights the importance of examining the sociohistorical dynamics that shape media representations, thereby deepening our understanding of role of the media in maintaining or disrupting gender order.

キーワード：女性同士の親密な関係、メディア表象、ジェンダー秩序

Keywords: Intimate Relationships between Women, Media Representation, Gender Order